

論文審査の結果の要旨

報告番号	博（経）甲第 32 号	氏名	新井 友梨
学位審査委員	主査	徐 陽	印
	副査	式見 雅代	印
	副査	丸山 幸宏	印
<p>題名： 舞台芸術に携わる非営利事業体の効率性による業績評価について</p> <p>論文審査の結果の要旨：</p> <p>本論文は次のように構成されている。</p> <p>第1章 研究の目的と位置づけ</p> <p>第2章 本研究の対象と分析手法</p> <p>第3章 米国のプロフェッショナル・オーケストラを事例とした、 効率性による業績評価</p> <p>第4章 日本のプロフェッショナル・オーケストラを事例とした、 効率性による業績評価</p> <p>第5章 分析結果の業績評価指標としての機能性と実用性</p> <p>第6章 本研究の総括と今後の展望</p> <p>本研究は、アートマネジメント業務に従事する筆者が直面した課題（すなわち、舞台芸術に携わる非営利事業体である業績を対象とした典型的な評価手法の不在）解決のため、効率性の評価手法である、最新の各種 DEA(包絡分析法)モデルを、舞台芸術に携わる非営利事業体である日米のプロフェッショナル・オーケストラに適用し、得られた業績評価指標が、ステークホルダーへの説明責任、改善、学習の観点から有効であることを明示したものである。</p> <p>まず、本論文の各章の内容は以下の通りである。</p> <p>第1章では、本研究の目的、先行研究の整理、本研究における研究方法として DEA を用いること、先行研究に対する本研究の位置づけ、研究の進め方について述べている。</p> <p>第2章では、本研究の対象を、日米のプロフェッショナル・オーケストラに設定する。これらの事業体の業績データを、従来用いられてきた評価指標の一部である、管理経費に対するプログラム経費の割合、総収入に占める補助金・寄付金の割合、総収入に占める事業収益の割合、総資産回転率等により分析している。これらの結果から、従来の分析手法によっては本研究の目的が達成されないことを確認している。</p>			

第3章では、第2章で設定した研究対象の一つである、米国のプロフェッショナル・オーケストラの業績について、財務データに着目したデータセットを作成し、DEAによる分析を行う。分析は三つの観点から行っている。一つ目は、1期間(2017年度)における効率性を Negative Data SBM モデルを適用して評価し、二つ目は、1期間における評価の精緻化を図るため、事業体の内部構造を考慮した部門効率性の評価を、Network SBM モデルを用いて行っている。三つ目は、複数期間(2015年度～2017年度)の同業績データを用い、異なる時点間の効率性の変化を、Negative Data Malmquist モデルを適用して評価している。

第4章では、第2章で設定した研究対象である、日本のプロフェッショナル・オーケストラの業績について、日本の非営利法人の運営環境を考慮し、財務データに加え、組織人員数、入場者数に着目したデータセットを作成し、DEAによる分析を行っている。分析は、第3章とも共通する2つの観点から行っている。一つ目は、1期間(2018年度)における効率性を、SBM モデルを適用して評価し、二つ目は、複数期間(2016年度～2018年度)の同業績データを用い、異なる時点間の効率性の変化を、Malmquist モデルを適用して評価している。

第5章では、第3章および第4章で導いた分析結果が、本研究が提案を目指す「舞台芸術に携わる非営利事業体の効率性による業績評価」を可能とする機能性を備えているか否かについて、アカウントビリティ、学習、改善の3つの観点から確認している。それにより、従来手立てがなかった、舞台芸術に携わる非営利事業体の業績評価手法を、実務者に提案できることを示した。

第6章では、本研究の全体を総括し、本研究が残す今後の課題を述べ、本論文を結んでいる。

本研究は、舞台芸術に携わる非営利事業体の業績を対象とした評価手法を確立することが目的であるが、上記6章を通して、かなりの部分達成できていると評価できる。

また、本論文の「博士学位論文の審査基準」の独創性、新規性、貢献度、論証可能性、論文の完成度についての評価は以下の通りである。

#### ① 独創性、新規性

舞台芸術に携わる非営利事業体の活動領域において、典型的な業績評価手法はなく、定量的な評価手法に関する先行研究は、DEAを除いてなかった。DEAを用いた先行研究では、基本モデルであるBCCモデルやCCRモデルを適用し分析を行っているが、本研究では負の値を含むデータセットに対応できるSBMモデルによる非ラディアル尺度で求められた、入力 of 過剰や出力の不足を用いて改善案を提言している点、さらにはネットワークDEAを用いて部門効率性と共に全体効率性を求めている点で独創性を持つ。また舞台芸術に携わる非営利事業体の効率性評価には用いられてきたDEAをそれに基づくマルムクイスト指標を用いて時系列としての効率性比較を行った例はなく、新規性があると認められる。

#### ② 貢献度

1期間のデータを対象とした、Negative Data SBM 無指向モデル及びSBM 出力指向モデルによる分析で効率値を求めることにより、それぞれの事業体の業界内の位置づけを明らかにできた点、また入力超過と出力不足の Slack から算出した改善値から、非効率な事業体に対し具体的な改善目標値を提供できたことは、舞台芸術に携わる非営利事業体であるオーケストラ

の業務評価への多大な貢献である。また、本研究で用いたモデルにより、得られた業績評価指標が、各事業体が学習し、改善を図り、またステークホルダーへのアカウントビリティを果たす一助となり得ることから、舞台芸術に携わる非営利事業体の効率性による業績評価手法として明示できた点が本研究の意義である。

③ 論証可能性

舞台芸術に携わる非営利事業体であるオーケストラの効率性評価のための評価値の導出、およびフロンティアに近づくための改善案の提言は、DEA を用いて行っており、さらに、効率性の時系列分析は Malmquist 指数を用いて行っており、それらの論証可能性は保証されている。

④ 論文の完成度

予備審査の際に指摘された点について、適切に改善が行われており、論文の完成度は一定の水準を満たしている。不十分な点を挙げるとすれば、日米の事例における分析の理由が十分に説明されておらず、それらを利用した論理展開の説得力がやや弱いことである。しかし、それによって本論文の学術上・実務上の意義・貢献が大きく損なわれるものではない。

以上により、本論文は、本研究科の「博士学位論文の審査基準」（独創性、新規性、貢献度、論証可能性、完成度）を満たすものと判断され、本学位審査委員会は全員一致で博士（経営学）の学位に値するものと判断する。